



図62 干納遺跡



図61 遺跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

干納遺跡 西蒲区樋曾

旧巻町と旧岩室村の境に弥彦・角田山塊の地下を貫く樋曾山隧道がある。干納遺跡は、この隧道の入り口付近の山裾にある。

干納遺跡が発見されたのは、隧道の三本目の流路が掘削された平成九（一九九七）年ころ、流路の底から縄文時代前期の遺物が大量に出土したことによる。工事関係者の話によると、遺物は東西五〇メートルの間で、平野側に次第に深さを下げながら出土し、最も深い所では地表下七メートルの所から出土したという。出土した土器は、縄文時代前期後半の中でも限られた時期の土器であり、干納遺跡がきわめて短期間に形成された遺跡であることを示している。石器は石錘が最も多く、この時期の集落としては一般的である。

干納遺跡の付近は「バケモノチョウバ」と呼ばれ、腐朽半ばの植物層（ガツボ）が厚く堆積する場所である。遺物が発見された地層は、この植物層のさらに下で、低湿な環境にあったため、さまざまな有機質遺物が良好な状態で残されていた。盆や鋤状の木



図64 シジミの貝殻(上)とヒシの実(下)

干納遺跡から出土した食料に関する遺物は多種多様であり、縄文時代の人々の食生活の様子を具体的に復元する上で欠かすことのできない資料である。

子には、ヒシ・クルミ・クリなどがあり、ヒシの量が圧倒的に多い。中には栽培植物も含まれており、ヒヨウタンの果皮と種子が出土した。



図63 クロダイの骨 上顎 幅2.4センチメートル

製品が出土し、植物で作られた編物の断片も残されていたようである。

縄文時代の人々の食料全般にわたる資料が、生々しい姿で出土した点もこの遺跡の特徴である。魚類では、サケ・トゲウオ・クロダイ・スズキなど、多様な種類の骨が見つかった。貝類はシジミが主体であるが、サザエなどの海産種も若干見つかっている。植物の種